

「いじめ」に取り組んだ実践の検討から考えたこと

センター協力研究員（1999年度）（千葉大学教育学部助教授） 保 坂 亨

学校において教員が「いじめ」に取り組んだ実践を著書にまとめたものが多数出ている。その中から福田博行・水原浩一・今泉博先生の実践をそれぞれの著者と共に検討する研究会（いじめ問題に関する実践事例の研究会）に参加する機会を得た。著者をはじめとする学校現場の教員・スクールカウンセラー、医師や大学の研究者などの多方面からの参加者が、それぞれの著書を読了したうえでその実践の意味を検討するという貴重な場となった。

私にとっては、まずなによりも実践者であるその先生の顔が見え、声を直接聞き、日々子どもたちにどのように接しているのかがある程度想像がつく中で検討できることの意味はきわめて大きかった。今でも福田先生の教員らしいメリハリのきいたしゃべり方、水原先生の誠実そうな立ち居振舞、今泉先生のおだやかな態度など鮮やかに思い起こすことができる。そうした印象を持っての検討ができたことは幸せである。（もちろん著書だけではうかがいしれない細かい情報を得てその背景を知ること重要であったが。）

以下こうした検討を通じて私が考えたことを記してみたい。以前に授業の検討とカウンセリングにおける面接事例の検討を比較して、ある実践の特徴を記述するには以下のような3つのレベルがあると考えたことがある（伏見・麻柄、1993；佐治守夫他；1996）。その実践（授業・カウンセリングの面接事例）だけにあてはまる特徴の記述（あそこのあの発問がとても有効だった）、他の実践にも翻訳可能な特徴の記述（人でないものを人にたとえたから、子どもたちは授業を楽しみ理解もしやすくなった）、抽象的・一般的な記述（子どもたちが興味を持ちやすい話だったから授業がうまくいった）。これに関して伏見・麻柄（1993）は、「他の教材を扱うさいの応用可

能性を高く秘めた授業作りの“原理”や“原則”を目指すためにはこのうちの第2のレベルの記述が重要であるとしている。しかし、カウンセリング面接の事例検討においても、その後の面接や他の対象・形態の面接への応用可能性を秘めた原理・原則を見つけることが理想ではあるが、その土台としてその面接事例にだけあてはまる特徴を記述することの重要性があると考えられた。

今回の「いじめ」に取り組んだ実践の検討においても、このひとつひとつの実践にだけあてはまる特徴の記述、つまりはその実践者個人の特徴を前提とした（だからこそ実践者と直接会えることの意味が大きい）、ひとつひとつの実践の意味を検討することの重要性を強く感じた。こうした学校という場において、あるひとつの実践をその独自性にこだわって詳細に検討することは、その実践が持つ意味を多方面から光をあて立体的に意味づける作業になると思うからである。

そして、この作業を通じて学校に対して教育相談的援助に関わってきた私には、3つの実践に共通と思われるものが見えてきた。それはそれぞれの実践者である先生と子どもたちの間の応答の密度である。話すこと・書くことを通じて、子どもたちと先生の間には実に密度の濃い応答がなされていると思われた。私がカウンセリングの世界で目指している「ていねいなコミュニケーション」が実現されているといってもよいだろう。それは原則として一対一のカウンセリングと比べて、一クラスの人数を考えると教員側の多大な労力と努力に支えられたものであり、それも含めて密度の濃い応答が3つの実践を支えている共通の基盤に見えたのである。これが他の実践にも翻訳可能な特徴の記述になっているのかどうかはわからないが、こうした角度から3人の実践者である先生ともう一度話してみたいと思っている。